

# 美との出会いにおける理性と感性の調和

村井 輝久 (筑波大学大学院／教育方法学)

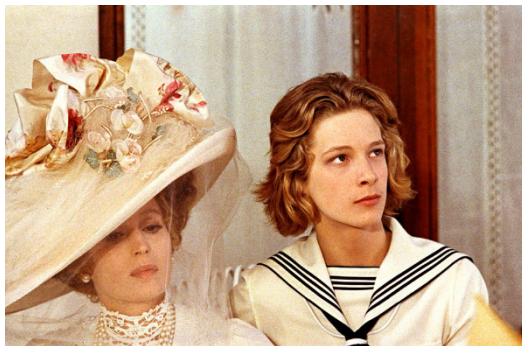
## ベニスに死す

(原題：Morte a Venezia / Death in Venice)

- ◆ 種別：DVD (映画)
- ◆ 監督／製作：ルキノ・ビスコンティ
- ◆ 製作年：1971 年
- ◆ 製作国：イタリア／フランス
- ◆ 販売元：ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント
- ◆ 時間：本編 130 分、映像特典 9 分
- ◆ 音声：オリジナル英語／ポルトガル語
- ◆ 字幕：英語／スペイン語／ポルトガル語／日本語／中国語／タイ語／韓国語／インドネシア語
- ◆ 価格：DVD ¥ 1,429+税



### あらすじ



主人公である老音楽家グスタフ・フォン・アッシェンバッハは、理性による芸術の創造を第一に考えている人物である。彼は、感覚的なものにまみれることなく、理性の働きを通して、音楽という芸術を構想しようと考えている。その彼は、静養のためにベニスに赴くが、そこで、まるでギリシア美を象徴するかのよう少年タージオに出会う。アッシェンバッハは、自然が生み出した、そのタージオの美しさに心を奪われる。以来、その音楽家は、タージオを追い求めるようになる。折しも、ベニスにはコレラが流行りはじめ、彼も患う。

### シーン再現

美少年タージオは、ベニスの海岸沿いを浅瀬に向かって歩いている。主人公の音楽家アッシェンバッハは、その海岸沿いの椅子に横たわっている。彼の頭は椅子の背もたれに預けられており、その場所で彼は、浅瀬を歩むタージオの動きをゆっくりと追っている。タージオは、浅瀬に立ち、腰から手を放し、そして、海の彼方を指さす。アッシェンバッハは、タージオが指さす方へ歩もうとするが、そこで力尽きる。

自己形成という営みについて、美の持つ意味から論究しようとする考え方がある。それは、美的教育論と呼ばれている。その教育論は、近代人における理性（～すべし）と感性（～したい）の分裂している状態に問題を見出し、人間におけるその両者の調和を目指している<sup>(1)</sup>。

本稿は、映画『ベニスに死す』について、美的教育論の考え方から考察しようとするものである。その際、主人公アッシェンバッハの「死」に注目する。その『ベニスに死す』については、「人間の全体性の回復への予感」が託されていると指摘されている<sup>(2)</sup>。

この解釈においては、タージオの導きにより、アッシェンバッハが「海」へと向かおうとするという物語展開が注目されている。ここで「海」は、「完全なもの」を象徴している。その理由は、主人公により、「海」が「尺度もなければ分割することもできない永遠のもの」、つまり「無」を表わし、それは「完全さの一つの形」と捉えられているからである。そして、その主人公は、その「海」に憧れを持っていた<sup>(3)</sup>。

だが、アッシェンバッハは、その「海」に辿り着くことなく、この世を去る。その主人公の「死」に注目するとき、この物語の内容は、次のような解釈を許すであろう。アッシェンバッハが憧れた人間における理性と感性の調和の境地は、社会が近代化される以前の不合理が支配する「魔術の園」であった<sup>(4)</sup>。だが、彼が生きている世界は、その「魔術の園」から解放された近代社会である。この二つの世界には時代的な隔絶がある。そのため、彼は、近代人が抱える理性と感性の分裂を現実の世界では回復することができなかった。この物語については、上記のような内容として、解釈できるだろう。

このことから、この物語について、美的教育論の考え方から考察するならば、次のような結論が導き出されるだろう。それは、その隔絶を見ないままに過去に憧れを抱き続けるならば、その憧れのみが大きくなり、現実の人間（自分）を見失うことになってしまうというものである。近代社会という現実を見ず、近代化される以前の社会に対する憧憬は、ロマンとなり、時代錯誤になってしまう。そのため、その憧れの中で、人間は、人間性の回復を実現しようとするようになってしまうだろう。本稿は、そこに人間性の回復の困難さを再認識する。

美は、確かに、人間に人間性の回復を予感させるかもしれない。しかしながら、人間は、近代化されたこの社会にあって、いかに人間の理性と感性の調和を考えていけばよいのであろうか。魔術が人々を支配していた時代にロマンを抱くのか、それとも、近代化された社会に生きる者として、理性と感性の調和を考えていくのか。この映画を観た者は、アッシェンバッハの「死」に、そのことを問わずにはいられないだろう。

### 【注】

- (1) 今井康雄「古典的人間形成論 シラーからニーチェまで」今井康雄編『教育思想史』有斐閣、2009年、143-163頁所収。
- (2) 岸美光「解説」トーマス・マン『ヴェネツィアに死す』岸美光訳、光文社、2007年。
- (3) トオマス・マン『ヴェニスに死す』実吉捷郎訳、岩波書店、1960年、改版。
- (4) 江藤裕之「『ヴェニスに死す』の『死』の意味 - ニーチェの悲劇論からの解釈 -」『長野看護大学紀要』第6巻、2004年、1-9頁所収。